〔新刊紹介〕

後藤康文・倉田実・久下裕利編『狭衣物語の新世界』

池田彩音

『狭衣物語』は、平安時代後期に成立した物語の中でも代表的な作品のうちの一つである。

本書は、編者三名を含む一一名の執筆者によって、一四本のそれぞれ異なるテーマでの論考が収められている。内容を概観するために、副題を省略して題目を掲げてみると、「文学史上の狭衣物語」「『狭衣物語』の成立とその作者」「『狭衣物語』の異文と改変」「『狭衣物語』と『源氏物語』」「『狭衣物語』と六条斎院物語歌合」「狭衣と源氏宮」「狭衣と女二宮」「狭衣と飛鳥井君」「『狭衣物語』の人脈と空間」「『狭衣物語』の超常現象」「『狭衣物語』の引歌・歌ことば」「『狭衣物語』の古筆切」「『狭衣物語』の注釈書」「『狭衣物語』—研究の現在と展望」となる。これらのテーマは、『狭衣物語』の特徴を踏まえた上で設定されており、様々な面から『狭衣物語』の研究に新たな方向性を示すよう構成されている。

『狭衣物語』が漢詩、和歌、『源氏物語』、あるいは史実的な要素を踏まえて極めて技巧的に書かれていること、作者の周辺や時代的背景などとの関わり、多種多様な本文の写本が多く残存し、諸本間の異同も大きいこと、女君単体の人物論にとどまらず、狭衣やその間に生まれた子との関係性から見ていくことの有効性など、先行研究の到達点を尊重した上で、少し視点を変えてみると、さらなる課題が浮かび上がることが論じられている。和歌史への影響や、古筆切や書き入れ本の存在など、『狭衣物語』がどのように読めるかだけではなく、どのように読まれたかを探る方法も提示されている。異文の多さなど、『狭衣物語』ならではの問題もあるものの、各論考における課題の見出し方については、『狭衣物語』を専門とせずとも参考になる。

全体として、二〇〇〇年以降、というのが一つの区切りとして意識されており、末尾に二〇〇〇年以降の研究文献目録を付すほか、各論考においても二〇〇〇年以降の文献が主として取り上げられている。

本書の執筆者には、本学会会員であり、二〇一六年度日本文学会大会でご講演くださった野村倫子先生や、本学教授である川崎佐知子先生が名を連ねていらっしゃる。後進に新たな研究の可能性を示し、学界の発展を促そうとする強い意志を感じさせる一書である。

（知の遺産シリーズ6　武蔵野書院　二六九頁　二〇一九年二月刊　本体価格　三、〇〇〇円）

（いけだ・あやね　本学大学院研究生）